

ちかまつうるる読本

# ザ近松

第三卷 近松を旅する 鯖江発



## はじめに

『ちかまつうるる読本 ザ・近松』第三卷「近松を旅する」を発行いたします。第一卷「近松を味わう」、第二卷「近松を知る」に続く、三部作の最終巻です。これまで、作品を味わっていただき、人物を知っていただきました。この巻では、皆さんに近松とともに旅をしていただこうと思います。

近松の生涯や作品を学ぼうとするとき、単に年表を追うとか、作品を鑑賞するだけでなく、生活の背景や時代の裏側を見るのも一つの方法です。歌舞伎・浄瑠璃作者として絶賛されながらも、私生活や、作者になる以前の生活については、誰にも明かさなかつた近松。子どもの頃から青年期を通し、近松の生涯にはまだまだ謎が多く潜んでいます。

この一冊は、そんな近松をめぐる心の旅にご案内します。この本では、近松の生涯や作品の舞台となった土地を紹介しながら、近松ゆかりの地をたどっています。皆さんも是非、このハンドブックを片手に旅を試してみてください。近松が誕生してから三五〇年。数多くの作品を遺し、今もなお、たくさんの人々に愛され続ける近松に、出会える街角が見つかるかもしれません。

最後になりましたが、冊子の編集にご協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。このシリーズを通して、近松愛好の輪が一層広まることを祈念し、巻頭のあいさつとします。

さばえちかもとくん近松倶楽部

# 目次

はじめに

近松への誘い

私の近松の旅

神戸女子大学教授 信多純一

6

吉江の里

さばえ近松倶楽部

11

第一章 越前・近江

越前(福井県)

福井市

鯖江市・朝日町

三国町

敦賀市

近江(滋賀県)

大津市

19

コラム 宝蔵1 近松を召しあがれ

36

第二章 山城・摂津・河内

山城(京都府)

京都市

37



摂津・河内（大阪府） 大阪市

大東市

摂津（兵庫県） 尼崎市

コラム 宝蔵2 近松応援団 58

第二章 長門・肥前 59

長門（山口県） 長門市

肥前（佐賀県） 唐津市

コラム 宝蔵3 近松研究のメッカ 「近松研究所」 67

## 特別寄稿

近松の旅 園田学園女子大学近松研究所 68

取材地・協力者一覧

資料提供一覧

あとがき

# 私の近松の旅

神戸女子大学教授 信多 純一

大学二年の頃、近松研究を志して以来凡そ五十年、近松の没した年齢と年  
も等しくなりました。思えば永い近松を尋ねる旅だったといえます。近松を知  
る大事な過程として、太夫研究、彼と関わりの深い宇治加賀掾の研究がその  
始めでした。

昭和三十二年、「解釈と鑑賞」誌が戦後初めて近松特集誌を編み、当時院  
生の私もこれに「近松の伝記―加賀掾・藤十郎・義太夫との関係を中心として」  
を執筆しましたが、これが後の私の研究に大きい影響を落しました。爾来近松  
の一生を追うことになり、一往先年完成した岩波書店版『近松全集』第十七

巻「伝記資料」の編纂で結実をみました。

昭和三十四年発行の森修氏『近松門左衛門』（三二一書房）は名著ですが、この手伝いを私もしまして、杉森家を共に訪い、杉森系譜の他、未紹介であった親類書などを調査することが出来ました。所は芦原であり時はお盆時分、柿の葉に盛られた鮎すをよばれた記憶が今に鮮明です。

こうして福井方面への近松を尋ねる旅が始まったのですが、勤務先の大阪大学国文科旅行で、古江にもまいりました。その川や周囲の山のたたずまいに、幼時の近松を想ったことです。また、こうした平穏な地から京の繁華の地に身を転じた信盛の境遇の変化は、その心情にいか程の大きい刺戟しげきを与えたことであらうと。

鯖江にはその後『近松全集』伝記編のために一人で訪ね、藩政資料を見せてもらったりしました。丁度近松の展示もしておられた時であったと記憶しています。

福井の街には、岩佐又兵衛の展覧会にかけて参りました。これも直接的ではありませんが、近松と深いつながりがある旅です。

『奇想の系譜』など名著のある美術史家辻惟雄氏に誘われ、熱海MOA美術館に又兵衛画『上瑠璃』絵巻の調査に山に籠ったことがあります。これは京都書院から、複製・翻刻そして辻氏・私などの解説付きで刊行されましたが、これを皮切りに私は『浄瑠璃御前物語』（十二段草子）の本格的研究に進みます。以来又兵衛の画業は常に注目しており、訪福に至ったのです。最近私は岩波新日本古典文学大系の『古浄瑠璃・説経集』で『浄瑠璃御前物語』を担当し、底本にMOA本を採用しました。従来は無視されていた本文なのですが、『浄瑠璃』本然の姿をより多く残す本文と考えてのことでした。近松はこの『浄瑠璃』に始まる浄瑠璃作者であり、この作自体をもとに『十二段』その他の作品をものしています。

初めに「近松の伝記」に挑んだことが大きい意味を持っていたことを記しま

した。この時の調査行が、後々人の縁、物の縁となって未だに関わりが網の目のようにつながります。

近松の仏教の師と言われていた江戸の傑僧浄厳（契沖の師でもある）を河内の寺に訪ねて、近松当時の宗教界・思想界の研究につながったり、同志の三井淳生画伯と知り合い仏教版画の収集に向かったりしましたが、先般近松自筆の『傾城反魂香』草稿の所在を教えてもらったり、持主の所に連れて行って下さった古書肆の主人などとのつながりも、そうした人の縁の上に築かれているのです。

こうした旅の道連れとの機縁は、私を近松の歌舞伎の代表作『けいせい仏の原』上本・『けいせい七堂伽藍』上本の入手や、最近また『今源氏六十帖』それぞれ名前が判っていました。所在が明らかでなかった稀本の入手といった幸運に導いてくれます。

私の近松探索の旅の終りに、このように“もの”で果報を与えてくれている

のは、近松さんの褒美ほうびなのかと自惚うぬぼれたりしますが、しかし本当は、“もの”ではなく彼が示してくれている作品の心、私達を打つ心こそ、私だけでなく皆人への贈り物であると思います。そして私の作品の心を探る旅はまだ続くようです。



### 信多 純一 しのだ じゅんいち

1931年大阪生まれ。京都大学文学部国語国文科卒業、同大学院文学研究科博士課程単位修得退学。松蔭短期大学・奈良女子大学・大阪大学を経て、現在、神戸女子大学教授、大阪大学名誉教授。主な著書に『のろまそろま狂言集成』（大学堂書店、毎日出版文化賞特別賞〈1975〉）、『絵巻 上瑠璃』（京都書院）、『近松門左衛門集』（新潮日本古典集成）、『近松の世界』（平凡社、角川源義賞〈1992〉）、『にせ物語絵』（平凡社）、『古浄瑠璃・説経集』（岩波新日本古典文学大系）などがある。文学博士、1999年紫綬褒章受賞。

## 吉江の里

さばえ近松倶楽部

明暦元年（一六五五）、松平昌親が吉江藩主として入部するに伴い、四六名の付け人が入部したが、その中に近松門左衛門の父、杉森信義の名がある。

近松門左衛門は、承応二年（一六五三）に出生、当時は二歳（数え年で三歳）の幼子で、幼名を「次郎吉」といい、その後約一〇年間に両親と五人の兄弟と共に春慶寺山の麓近く、吉江の地で暮らすことになった。

「次郎吉」の暮らしぶりを想像しながら、



春慶寺

信長の焼き討ち通がれし春慶寺の  
山号頭たせて夕光ただよ  
う（春慶寺にて）

吉江の里を散策してみよう。

うらかな春のある日、一〇歳になった次郎吉は早朝鶏の鳴き声で眼を覚まし、慣れ親しんだ近くの春慶寺山に向かった。中腹にある春慶寺へと続く緩やかな参道の脇には竹林が生い茂り、登り口の地藏堂には笏谷石しやくたにいしで彫られた六体の地藏尊が安置され、頭巾ずきんと輪袈裟わげさの朱色がひととき鮮やかである。春慶寺の境内には樹齢千年とも推定される杉の木が天を押し上げている。ほどなく着いた山頂から吉江の里を眺めながら、自分の将来に思いをめぐらした。父のよう



吉江藩城下町跡想定図



旧吉江城下のたたずまい（吉江七曲り通り）

に吉江藩士として奉公するのであろうか。それとも……。まだ何も確たる思いではないが、幼いころに母につれられて一緒に見た幸若舞こうわかまいが頭の隅に残っており、春霞のように脳裏を去来する。次郎吉の胸の中は、いまだ五里霧中であつた。

春慶寺山は、春はさくら、秋にはもみじ狩りが楽しめる自然の楽園である。その中腹に建立された春慶寺は、正保しょうほう二年（一六四五）頃「春日山春慶寺」の山号を賜っているが、その起源については飛鳥、奈良時代にまで遡さかのぼると

も推定されている。無住の寺となった今でも、「シユンケツサン」と親しまれ、檀徒だんとによつて毎月「講」が勤められており、住民の心の拠より所となっている。

次郎吉は境内の杉の大木に登り、日野の流れのきらめきや、遠く広がる田園風景を眺めていた。春慶寺は近松門左衛門が成育していく

## 近松の里—立待地区—の活動

吉江の里で過ごした近松を後世に伝え、立待地区の文化の振興に資するため、立待公民館が中心となり、さまざまな活動を展開している。

昭和52年 近松の命日（11月22日）に俳句会を開催（近松門（1977）左衛門奉賛会）

53年 立待公民館横に近松門左衛門文学碑を建立

平成5年 『近松門左衛門と吉江藩』発行

10年 第1回「たちまち近松まつり」開催

毎年「真桑の人形浄瑠璃」（岐阜県真正町、国指定重要無形文化財）を公演

13年 「立待近松の里づくり事業推進委員会」発足

14年 吉江町の公民館前に近松門左衛門像を建立

「たちまち近松人形劇団」創立（立待小学校児童）

第5回「たちまち近松まつり」で創作劇を旗揚げ公演

上での「原風景」として大きな意味を持つと同時に、人間形成に強い影響を与えたであろう。

次郎吉は学問にも励み、古老達が話す吉江の遺跡についての話を好んで聞いた。夜のとばりがおけると、行灯あんどんの灯のもとに机に向かつて、日頃聞く吉江神社の故事来歴を一人頭の中で思いめぐらしながら眠りにつき、夜が明けると学問所

### ちかもんくん さばえ近松倶楽部のあゆみ

平成8年 さればでござる近松講座 開講  
(1996) 福井大学教授三好修一郎氏の軽妙な語りを受講生を魅了、平成10年まで継続。その後、この講座による近松顕彰への市民活動の高揚を、このままにしたいくない、と愛好家が集い、『さばえ近松倶楽部』として活動をスタート。

11年 『さばえ近松倶楽部』発足  
活動内容 年数回の講座開設、文楽・歌舞伎の鑑賞、自主学習会、機関紙の発行など  
長門市視察交流会

12年 『さばえ近松ものがたり』刊行  
近松ゆかりの地交流事業（鯖江市・長門市・尼崎市）

13年 『ちかまつうるる読本』（3冊シリーズ）刊行

に行つて、熱心に先生の講義を聞く学問好きな少年であった。そのかたわら、俳句を嗜むたしなようになっていた。

次郎吉はまた、学問所からの帰路、吉江七曲り通りを、足駄あしだの音を響かせながら袴はかまの裾すそを蹴上げて通り抜ける闊達かつたつな少年であった。

吉江七曲り通りは、吉江藩の城下町の名残で、この辺り一帯の家の地割りや、道路の区画はほとんど当時のままであると言われている。「七曲り」の名のとおり、道路は七つの鉤型かぎがたに曲りながら、柳町・東町・本町・牛屋町・西町・新町の六つの町並みを貫いている。

江戸後期、今から約二〇〇年前には、一七〇軒の屋敷が並び「小江戸七曲り」とも呼ばれたそうだ。当時は吉江藩の家臣達や馬が通り、米や野菜を積んだ大八車だいはちぐるまが「ガラガラ」と音をたてながら往来していた。今でも昔の面影を残す立派な黒塀と門構えの家が残っている。その辺りの情景をながめると、めまぐるしい日常から隔てられ、異次元の世界に身を置くような、不思議な安堵

感に充たされてゆくのである。

時は流れ、藩を辞した父は一家を引き連れて京都に移るが、次郎吉はその頃には立派な文学青年に成長していた。

次郎吉が十九歳の頃に作った俳句に次の句がある。

しら雲や はななき山の 恥かくし

そして京都に移り住んでからの次郎吉は、公家奉公の経験の後、文学的才能が開花し、浄瑠璃、歌舞伎作者としての名をほしいままにし、元禄三大文豪の一人として、浮世草子の井原西鶴、俳諧の松



近松門左衛門文学碑（立待公民館）

尾芭蕉と並び称される。

鯖江市では近松が幼少年期を過ごしたゆかりの地として、昭和五十三年、立待公民館横に記念碑庭園を造り、近松の辞世文が記された碑や、水上勉氏揮毫の『近松門左衛門先生由縁之地』と記した顕彰碑を建立した。

この碑と対面するとき、近松研究者の大阪市立大学教授森修もりしゅう氏の「解説文」によって、この吉江の地が近松ゆかりの地であることのお墨付きの意味が脈々と伝わってくるのである。

# 第一章

## 越前 近江

(福井県)  
(滋賀県)



## 越前 福井

近松が生まれたまら

(福井県福井市)

福井市は近松が生まれたまちです。近松の父は福井藩の藩士であつたという記録があり、近松は福井で誕生したと考えられます。

正保二年(一六四五)、福井藩の分家として吉江藩しやうほうが成立し、この時父は吉江藩士となりました。近松は承応二年(一六五三)に福井で生まれ、明暦元年(一六五五)、一家で吉江に移つたと考えられます。

福井駅前まへの北の庄通りには北の庄城址柴田神社、市街地中心の福井城跡に県庁や市民の憩いの地中央公園があります。

柴田神社は、明治四十二年(一九〇九)に、柴田勝家しばたかついえ



福井城跡(福井県庁)

を祀り北の庄城本丸跡に創建されました。境内社に稲荷神社があり、平成十年（一九九八）には、お市の方の三姫（茶々、初、江与）を祀る三姉妹神社が創建されました。

天正三年（一五七五）、柴田勝家が北の庄に入国し、北の庄城を築城しました。かなり大きな城であったようですが、天正十一年、豊臣秀吉に攻められ落城しました。妻のお市の方（織田信長の妹）や家臣も城と運命をともしました。毎年春には「福井時代行列」で、勝家やお市の方に会うことができます。

その後慶長五年（一六〇〇）、徳川家康の次男結城秀康が福井藩主となり、同十一年に築城、城下町を整備しました。現在の福井市街の基礎はこの頃に整ったといえます。寛文の大火によつ



福井市街



北の庄城址柴田神社

て城はほとんど消失しましたが、福井の名の起りとなった「福の井」と呼ばれる井戸跡が天守台下にあります。

市の東部一乗谷いちじょうやには、南北朝時代に朝倉氏が居を構え、城下町を形成しました。天正元年、織田信長によって滅ぼされましたが、現在は国の特別史跡に指定され、町並が復原されています。その奥には、佐々木小次郎が「つばめ返し」をあみだしたと伝えられる一乗滝があります。

市街地の南西には、足羽山があります。継体天皇像や、古墳群、たちはなの橘 曙覧記念文学館、郷土歴史博物館、自然史博物館などがあり、また、春には桜、初夏には紫陽花あじさいが咲き誇ります。フィールドアスレチックとミニ動物園を備えた遊園地や、植物園もあり、自然を満喫しながらのんびりと散策するのにもってこいの公園です。

## 越前 鯖江

近松が幼いころ遊んだまら

(福井県鯖江市・丹生郡朝日町)

鯖江市は幼少年期を鯖江の吉江で過ごした、文豪近松門左衛門に出会えるまちです。

市の南部、鯖江台地の南端に王山古墳群があります。昭和四十二年(一九六七)に国の史跡として指定を受け、古墳公園として整備されています。少し北に行くと鯖江の顔、西山公園があります。安政六年(一八五九)第七代鯖江藩主間部詮勝が、領民と共に楽しむ庭園として嚮陽溪を開拓しました。昭和になってつつじが植栽され、日本海側随一のつつじの名所となっています。約四万三



西山公園

## 福井県



## 鯖江市・朝日町



## 吉江周辺

千株のつつじが咲き乱れる季節は実にみごとなもの。春は桜、つつじの花が咲き誇り、夏にはホタルが飛びかい、レッサーパンダでおなじみの西山動物園など、季節を問わず市民の憩いの場となっています。

西山公園の北に鯖江市資料館があります。館内には近松の座像や近松関連の年表、浄瑠璃の正本などがあります。このほか資料館には古墳時代の資料や、江戸時代の鯖江藩の資料などが多数収蔵・展示されています。鯖江市の歴史を学ぶのに最適な施設です。

鯖江市は、古墳時代から歴史の続くまちです。市内には約八〇〇基の古墳が点在し、大正六年（一九一七）に新町で「銅鐸」どうたたくが、昭和三十一年（一九五六）には西山公園で「有鉤銅釧」あせうずがわが発見されています。また戦国時代の城跡なども多く残っています。

さらに北に進むと、浅水川あせうずがわがあり川に沿って



有鉤銅釧  
弥生時代の青銅製の腕輪  
鉤(かぎ)が付いているのは全国でも珍しい

下るといよいよ吉江の地にたどりつきます。

正保二年（一六四五）吉江藩が成立しました。館は現在の浅水川に架かる弁天橋のあたりに建てられました。川のはとりに吉江藩館跡の石碑が建っています。また立待公民館の前には三味線の形をした庭や文学碑があります。

重厚な趣の西光寺さいこうじの表門なまがは、吉江藩館の門を移築したものです。城下町のたたずまいを残す七曲りなど、吉江の地は、今もなお当時の吉江藩を偲しのぶことができ、近

松が遊んだであろう春慶寺山しゅんけいじや日野川の自然が多く残っています。



西光寺表門

吉江付近の地区に三社の天満宮があります。菅原道真すがわらみちざねのゆかりの地でもあり、道真の三男おとの乙ちよまる千代丸が居住したと伝えられており、西番町に館跡の碑が建てられています。このような環境が後の浄瑠璃てんじんき『天神記』につながっているかもしれませんね。

鯖江市では、平成十年（一九九八）に近松生誕三四五年祭を開催し、マスコットキャラクター「ちかもんくん」を創出するなど、近松のまちづくりを推進しています。

## ■ 丹生郡朝日町

にゅうぐんあさひちよう

吉江から七曲りをぬけ、石田の渡りで日野川を越え、石田をさらに西へ進むと朝日町です。高台にある古墳公園からは、鯖江が一望できます。朝日町の歴史は古く、縄文・弥生時代、古墳時代の資料を見ることができます。鎌倉時代には泰澄大師が越知山おちさんに大谷寺を開き、山岳仏教（人里から離れて山の中で修行する仏教）が盛んになりました。

石田の西に接する田中、ここは、室町時代に栄えた幸若舞の発祥の地です。浄瑠璃や歌舞伎など、後の芸能や文学に大きな影響を与えた幸若舞は、幼い近松の心をどのように揺さぶったのでしょうか。

## 鯖江の産業

鯖江は、国内シェアの約90%・世界シェアの約20%を占めるめがねの街です。近年はチタンや形状記憶合金など新素材による新技術の開発にも力を入れており、日本の眼鏡産業の首都ともいえるでしょう。

繊維の街としても有名で、最近ではハイテク技術を駆使し、医療・環境資材など新分野への挑戦も試みられ、世界から熱い注目を集めています。

また、漆文化発祥の地でもあり、日本の漆器五大産地のひとつです。河和田塗<sup>かわだぬり</sup>ともいわれる越前漆器は1500年の歴史をもち、その研ぎすまされた技<sup>と</sup>は伝統工芸として高い評価を受けています。



越前漆器



めがね

# 越前 三国 『けいせい仏の原』の舞台

(福井県坂井郡三国町)



三国町

び、上新町は商店街や遊郭を形成していました。当時三国の遊女は文学の素養が高  
く、俳諧に秀句を残す遊女もいたそうです。現在でも古い町並みに当時を偲ぶこと

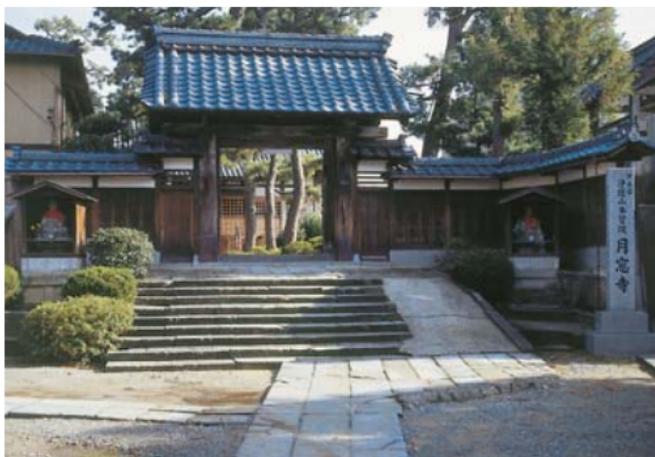
三国町は、近松の歌舞伎作品の中でも最高傑作のひとつ『けいせい仏の原』の舞台となったまちです。京都東山での月窓寺「沓はき如来」の開帳を取り入れた作品で、三国の月窓寺や遊郭が舞台になっています。

江戸時代、三国の市街は、下町と上新町に大きく分かれていました。下町は九頭竜川沿いや港橋付近に問屋の蔵が立ち並

ができますが、残念ながら月窓寺の宝物「杵はき如来」は残っていません。

三国湊は、古代より続いており、中世にさらに発達、中世後期には軍事的な重要度も高まりました。江戸時代には北前船きたまえぶねによる運送が盛んになり、交易圏の広がりや商品流通経済が活発になり、ますます賑うようになりました。

日本海の奇勝「東尋坊」とうじんぼう。見所は海食によって荒々しくカットされたさまざまな岩肌です。絶壁に日本海の荒波が打ち寄せるさまは実に豪快です。一年を通して観光客で賑い、特に夏には、海水浴で県内外から多くの人が訪れます。



月窓寺

## 越前 敦賀 『けいせい反魂香』の舞台

(福井県敦賀市)

敦賀市は、浄瑠璃『けいせい反魂香』の舞台となったまちです。

「…天満天神の告げありて、越前ノ国氣比の浦へと旅羽織…」主人公狩野元信が、松を描くために敦賀の浜にやってくるころから話が始まります。

敦賀市は、古来より敦賀港を中心に日本海側諸国の玄関口として栄えてきました。

市街中心部にある緑に包まれた氣比神宮と、その大鳥居の素晴らしさは実に見事です。大宝二年(七〇二)の建立と伝えられる氣比神宮は、仲哀天皇をはじめ七柱の祭



敦賀市街

神を祀る北陸道の総鎮守です。高さ一一メートルの大鳥居は、木造としては春日かすが大社たいしや（奈良）、厳島神社いつくしまじんじや（広島）と並ぶ日本三大鳥居の一つで、荘厳な境内は越前一の宮としての風格が漂います。また、かつてここを参拝した松尾芭蕉まつおばしやうの像と句碑も残っています。

商店街から少し行くと、氣比の松原があります。白砂青松の松原は訪れる人にやすらぎを与え、夏は松原海水浴場として、県内外からの多くの海水浴客で賑います。

京の都からは比較的近い氣比の松原ですが、近松が数ある松原の中から敦賀の地を選んだのはどうしてでしょうか。氣比の松原は、三保みほの松原（静岡県清水市）・虹の松原（佐賀県唐津市）と並び日本三大松原の一つで、当時の京・大坂にもその



氣比神宮



氣比の松原

名は知られていたはずですが。さらに、近松が鯖江から京へ移るとき、この敦賀の地を通っていたとすれば、初めて見る大海原、白砂の海岸、限りなく続く松原は、多感な少年の心に強く焼きつけられたに違いありません。

また、松といえは、『曾根崎心中』の末尾、

「松、棕櫚しゆろの一木ひときの相生あいおい」に体を結びつけ、

徳兵衛とお初がこの世に別れを告げる場面はあまりにも有名です。

# 近江 大津

近松が遊学したと伝えられるまら

(滋賀県大津市)



滋賀県



大津市街

「大津」は琵琶湖の大きな入江、船着き場を意味しています。その地名のとおり、大津は琵琶湖とともに歩み、さらに比良・比叡の山並みに囲まれた自然豊かな地です。

近松は近江の高観音近松寺たかかんのんじんしょうじに遊学したと伝えられています。京都に移り住み、一条家などに公家奉公した後、自分の将来を悩み近松寺で修行したということです。

近松寺は、浄土真宗中興の祖蓮如れんによが創建した近松坊の跡で、重要な旧跡である別院です。



近松寺

また関蟬丸神社せきのせみまるじんじゃの別当寺べつとうじ（神社に付属して建てられた寺）でもあります。関蟬丸神社は音楽芸道の祖神である蟬丸を祀っており、近松寺も芸能に深くかかわっていました。そのことが「近松」というペンネームの由来であるとも伝えられています。

また、日本の東と西を結ぶ交通の要地として古くから重視され、発展してきました。市の西部にある日本三関の一つ「逢坂関おうさかのせき」も交通の要衝として、街道一の賑いを見せていました。

大津のみやげ物の一つに大津絵があります。人気のあった大津絵は、近松門左衛門の浄瑠璃『けいせい反魂香』にも採り上げられました。大津絵の絵師又平や、大津絵から抜け出た奴や藤娘などが活躍します。

## 近松を召しあがれ

近松が幼少年期を過ごした鯖江には、銘菓「近松」・「ちかもんくん」、清酒「近松」・「門左衛門」、日本料理店「近松」など、近松を味わうことのできる品々があります。

元禄三大文豪の一人であり、東洋のシェークスピアと称される近松が育ったまちで、ぜひ皆さんに食していただきたいですね。



近松 (大黒屋)



ちかもんくん (栄進堂)



近松・門左衛門 (近松)



近松 (サバエシティホテル1F)

# 第二章

山城

(京都府)

河内

(大阪府)

摂津

(兵庫県)



## 山城 京都

近松と育んだまら

(京都府京都市)



春 (上賀茂神社)

平安京以来の千二〇〇年の歴史に育まれた自然と伝統文化が調和するまちです。季節の移り変わりも美しく、四季折々に人々を楽しませてくれます。日本三大祭のひとつ葵祭、八坂神社の祇園祭、秋の紅葉。洛北、洛中、洛南を貫いて鴨川が流れ、二条城、御所、賀茂神社の緑が心を潤します。

京都駅の南東、東山区に臨濟宗大本山東福寺があります。東福寺の紅葉は有名で秋の京都には欠かせないものの一つではないでしょうか。その塔頭の一つに芬陀院雪舟寺があり、近松が京都で最初に奉公に出た一条禅閣恵観の茶室があります。美しい紅葉をながめながら、近松もお茶をいただいたのかもしれないですね。



夏（総本山永観堂禪林寺）

哲学の道の西方四〇〇mく

らいに、真如堂しんにょどうというお寺があ

ります。ここには、近松が一時

期仕えた正親町公おおぎまちきんみち通の墓所があ

ります。哲学の道は、若王子橋から銀閣寺橋までの約2kmにわたる疏水そすいべりの小道

で、哲学者西田幾多郎が思索の道として散策したことから名づけられました。春は

桜、秋は紅葉の名所として京都内外から多くの人が訪れます。

鴨川の流れはおだやかに、昔も今も華やかな京をながめてきました。夏には納涼



京都市街

床が並び、涼を求める人々がそぞろ歩きます。近松が住んでいた頃の四条河原は、劇場が立ち並び一大娯楽街でした。近松は二十歳代の前半に公家奉公をやめ、宇治加賀掾との出会いをきっかけに芝居の世界に入っていきました。加賀掾はじめ坂田藤十郎や芳沢あやめなどの当時は有名であった役者や関係者との付き合いを深めていったのです。

近松が京都で歌舞伎の作品を書いていたころの、日記が残っています。道化役者で作者も兼ねていた金子吉左衛門が、元禄十一年（一六九八）の生活を自ら記録したものです。その中で金子や近松は、役者の坂田藤十郎や他の役者達と、毎日のように狂言の相談をしています。日記によると、金子の住まいは四条大橋の近くにあったようです。夕方に金子宅を訪れ夜中に自分の家に帰るなど、近松も近所に住んでいたのではないのでしょうか。

山科区御陵、天智天皇山科陵の北に本圀寺があります。元々下京の西本願寺北



四条河原の芝居町

(臨川書店刊『新修京都叢書』第八)



冬（東福寺通天橋）



秋（大覚寺大沢の池）

にあった本圀寺には、近松の父や兄が葬られています。父が亡くなったのは近松が三十四歳（数え年で三十五歳）の時です。

『けいせい壬生大念仏』『女郎来迎柱』『壬生秋ねんぶつ』の三部作でおなじみの壬生寺は、二条城

の南にあります。平安時代からの古い寺院で、壬生狂言、新撰組ゆかりの寺としても有名です。

思春期の頃に京都に移り住み、少年時代を過ごした田舎とはまったく環境の異なる大都市での生活は、近松にどんな影響を与えたのでしょうか。公家奉公、四条河原の芝居町、たくさんの人との出会いと別れが、作者としての近松を育んでいったのでしょうか。

## 摂津 大阪

近松が多くの作品を生み出したまら

(大阪府大阪市)



大阪城

大阪は古くから政治・文化の中心地として、歴史上大きな役割を果たしてきました。旧石器時代や縄文・弥生時代の遺跡、古代の難波宮跡をはじめ大坂城跡など、貴重な文化遺産が数多くみられます。特に豊臣秀吉が大坂城を築いて後は、「天下の台所」として繁栄しました。

大阪のシンボル大阪城。天正十一年（一五八三）、豊臣秀吉が全国統一の拠点として築城に着手、三年を費やして完成しました。大坂の陣で焼失、江戸時代に再建、その後部分的な



大阪市街

大阪24区

焼失、修築を繰り返し、明治元年（一八六八）に火事により大部分を焼失し、昭和六年（一九三一）大阪市が天守閣を再建しました。平成七年（一九九五）から九年にかけて、市民の寄付により改修工事が行われ、美しく生まれ変わりました。大阪城公園は市民の憩いの場として、また国内外から多くの人々が訪れ、賑いを見せています。

## 北区・都島区

近松の最初の世話物『曾根崎心中』の舞台となつた堂島新地。曾根崎、露天神社、大阪天満宮など、大阪随一の繁華街にも文学碑や歴史の足跡が数多く残っています。露天神社は、『曾根崎心中』の上演以来お初天神として知られてきました。境内にはお初と徳兵衛の比翼塚（愛し合つて死んだ男女を一緒



露天神社（お初天神）

に葬った塚）があります。

大阪といえば「水の都」。市内を縦横に走る川に架けられた橋の数は八百八橋ともいわれます。『心中天の網島』の道行では「名残の橋づくし」、いくつもの橋を渡つて、小はると治兵衛は最期の地網島へたどり着きます。しかし道行の舞台となつた蜷川は、明治四十二年（一九〇九）のキタの大火をきつかけに埋め立てられ、現在では碑が残っているだけです。また、二人が心中した大長寺には、小はると治兵衛の比翼塚があります。

大阪は水上交通が発達していました。南天満公園の対岸には八軒屋船着場があり、毎日舟や人の往来でたいへん賑っていました。野崎慈眼寺（野崎観音）への「野崎まいり」が人気で、八軒屋から船で大川をさかのぼり野崎まで行くコースと、川に沿つて堤に行くコースがあり、多くの人が参詣してました。『女殺油地獄』でも幕開きの場面に採り上げられています。



竹本義太夫の墓（超願寺）



近松の墓（谷町）

ちゅうおうく  
天王寺区  
てんのうじく

道頓堀。浪花の粋と人情に育まれた上方芸能、  
文楽・歌舞伎の古典から、漫才や落語、喜劇の  
笑いが街中にあふれます。江戸時代には竹本座、  
中座、角座、角丸座、豊竹座の五座が軒を連ね、  
連日賑いを見せていました。竹本座は、  
初代竹本義太夫たけもとぎだゆうが創設し、近松の作品を  
上演し賑いました。

昭和五十九年（一九八四）に開場した  
国立文楽劇場は、伝統芸能である文楽の  
殿堂ともいえる施設です。文楽のほか日  
本舞踊や邦楽の公演、また文楽の若手輩

出の養成事業も行っています。

古代からの歴史をつづる上町台地。谷町筋のビルの間にひっそりと近松の墓が立っているのをご存知でしょうか。当初近松の妻の菩提寺である法妙寺境内にありましたが、お寺の移転に伴い現在のところに移されました。

『曾根崎心中』にも登場する玉造稲荷神社は、大坂二十三所観音廻りの第十番札所として、古くから人々の信仰を集め賑っていました。この大坂二十三所観音廻りとは、西国二十三所になぞらえて大坂三十三か所の観音様を拜んでまわり、お札を納める巡礼で、当時の人々の間で広く流行していたものです。

「いくたまさん」と親しまれる生国魂神社は、『曾根崎心中』の発端の舞台となつたところ。境内には浄瑠璃関係者や芸能愛好者の信仰を集める浄瑠璃神社があり、毎年春分の日には浄瑠璃祭が催されています。神社から南へのびる松屋町筋は、小さなお寺が立ち並ぶ寺町です。源聖寺坂、口繩坂などさらに奥にある寺院への坂道が幾筋もあり、都会の中にも風情が漂います。銀山寺には『心中宵庚申』の

お千世と半兵衛の比翼塚が建てられています。

『曾根崎心中』が大当たりしたのは近松が五十歳（数え年で五十一歳）のときです。そのころは京都に住み、もっぱら歌舞伎作者として活躍していました。その後浄瑠璃作者として生きていく決心を固め、宝永三年（一七〇六）近松が五十三歳（数え年で五十四歳）のとき、大坂に居を移します。歌舞伎の作品はその多くが役者坂田藤十郎のために書かれたものでした。

浄瑠璃の興行は、太夫（語り）、作者、座本（経営者）が一体となつて行われます。浄瑠璃の歴史の中で太夫の代表的人物が竹本義太夫であり、座本は竹田出雲、作者はもちろん近松門左衛門と言えるでしょう。青蓮寺には竹田出雲の墓が、超願寺には竹本義太夫の墓があります。



お千世・半兵衛の比翼塚（銀山寺）

## 浪速区・西成区

新世界のシンボルタワー通天閣。明治四十五年（一九一三）にパリのエッフェル塔を模して建造され、当時は東洋一の高さを誇りました。「天に通じる高い建物」というのが名前の由来だそうです。その通天閣から北西へ向かうと、難波八阪神社があります。この神社で毎年一月の第三日曜日に綱引き神事が行われています。参加者が八頭八尾の八岐大蛇やまたのおろちの形に縄をより合わせ、境内でその年の恵方えほう（干支えとによって定められるめでたい方角）に引き合います。その後綱を担かつぎ神社の周囲を巡行します。享保四年（一七一九）初演の浄瑠璃『平家女護島』へいけによびのしまにこの神事が登場することから、かなり古くから神事が行われていたとされています。



おさんの墓（安養寺）

一六世紀ごろから堺の発展とともに拓ひらけ、天下茶屋跡てんがちやなどの旧跡が残る西成区には、日本最大級のオーケストラ練習場である「大阪フィルハーモニー会館」があり、大阪フィルハーモニー交響楽団の活動拠点となっています。

西成警察署の東、商店街の奥まったところに松乃木大明神まつのみきだいみょうじんがあります。ここには近松門左衛門の大きな碑が建っています。高さおよそ二メートル余の碑で、「平安堂近松巢林子信盛碑」と記されています。以前は天王寺公園内にありましたが、明治三十四年、第五回国内勸業博覧会（国内物産博覧会）開催の折、現在地に移されたそうです。この碑の隣には、三味線の胴に張る猫の供養のため、遊芸関係者の拠金で建てられた猫塚があります。

ここから少し南に行くと、天下茶屋公園があり、そのすぐ目の前には安養寺あんようじがあります。安養寺には『心中天の網島』で夫治兵衛に貞節を尽くした妻として有名なおさんの墓があります。



## 河内 大東

近松のもう一つのお墓が残るまら

(大阪府大東市)

東は金剛生駒国定公園を境に奈良県に、西は大阪市に接する、豊かな自然と近郊都市の街並みが見事に調和するまちです。大東市を訪れたならぜひ行っておきたいところが、『女殺油地獄』でも採り上げられている「野崎観音」です。

野崎まいりで有名な野崎慈眼寺は野崎にある曹洞宗のお寺です。野崎まいりは毎年五月に行われる「無縁経法要」のことで、全てのものに感謝のお経をささげる行事です。元禄



野崎観音 (慈眼寺)

時代に始まり、当時はお釈迦様の誕生日の四月八日前後に行われていました。時候も眺めもよく、散策コースとして手ごろであったため、近隣からの参拝者でたいへん賑いました。

野崎観音の南に法妙寺があります。大阪谷町にあった法妙寺が、昭和五十五年（一九八〇）この地に移転しました。現在、大阪市の谷町に近松の墓が残っていますが、ここにもそれを模したお墓があります。



大阪府



大東市街

## 摂津 尼崎

近松が晩年訪れたまら

(兵庫県尼崎市)

尼崎と近松のかかわりは、正徳四年（一七  
一四）近松が六十二歳（数え年で六十三歳）  
から享保九年（一七二四）、七十一歳（数え  
年で七十二歳）で亡くなるまでの十年間余で  
す。近松は晩年、たびたび尼崎を訪れました。  
久々知くくちというところに広済寺こうさいじがあります。  
ここは近松の壇那寺だんなでらです。当時廃寺同然だっ  
た広済寺を再興した住職の日昌上人にっしょうしょうにんと近松  
は、大坂に住んでいた頃から親交が深かった  
ようです。近松は広済寺の再建にも貢献し、



近松公園・近松記念館



兵庫県・尼崎市街

母親が亡くなったときも同寺で法要を営みました。本堂の裏には「近松部屋」と呼ばれる近松の仕事部屋があり、ここで執筆活動をしていたと伝えられています。近松の墓もこの寺に建てられました。境内の奥まったところに立てられ、墓碑の表には近松の法名と、妻の法名が並んで刻まれています。この墓は昭和四十一年（一九六六）に国指定史跡に指定されました。

毎年十一月二十二日の近松の命日前後の日曜日には、近松祭が行われています。文楽人形による墓前祭、近松音頭や地元小学校浄瑠璃クラブなどによる芸能が上演されます。

また、広濟寺には「過去帳」をはじめ、近松が若いころに奉公していた公卿くぎょうから拝領した品と考えられる「法華二十八品和歌」や「後西院勅筆色紙」など近松に関する貴重な資料も数多く残され、「近松記念館」に展示されています。記念館の近くには日本庭園を配した「近松公園」があります。広濟寺、近松記念館、近松



広濟寺



近松祭の様子  
 (人間国宝・吉田文雀氏による文楽人形の墓前祭)

公園を中心とした「近松の里」の周辺は、歴史と文化にふれあう場所として親しまれています。

このほかにも、近松公園に「近松門左衛門の銅像」が、JR尼崎駅前には『めいど冥途の飛脚ひきやく』の主人公梅川うめがわの像が、J

R塚口駅に近松モニュメントが、阪急塚口駅横には近松顕彰碑と硯すずりをかたちどったモニュメントがあり、まさに「近松のまち あまがさき」を演出しています。

尼崎市が文化振興の核として「近松」を取り入れたのは、市制七〇周年を迎えた昭和六十一年（一九八六）からです。工業都市から



近松の墓（広濟寺）

文化都市への変革をめざし、「近松」を取り入れた諸事業を展開し、「近松ナウ業事」を進めてきました。今日まで、近松座歌舞伎や文楽公演、近松創造劇場の上演など大規模な事業を展開しています。このほか、市民の間でも、近松応援団、近松かたりべ会、近松音頭保存会が結成され、それぞれ活発な取り組みが行われています。お酒やお菓子、海苔<sup>のり</sup>、Tシャツなど近松グッズも事業者の協力により多数製品化されています。



梅川の像 (JR尼崎駅)



近松断章 (阪急塚口駅)

## 近松応援団

尼崎には「近松応援団」があります。近松のまちを標榜する尼崎市と、園田学園女子大学の近松研究所との三位一体で活動する団体です。会員数は二七〇名余。学習会の開催、機関誌「さえずり」の発行、人形劇の実演、ゆかりの地との交流などが主な活動内容です。平成十二年に開催された近松交流会をはじめとして、鯖江市にも何回も来ていただきました。「わきあいあい」がモットーの応援団です。

### ◆ 応援団からのメッセージ ◆

近松さんに親しみたい、迫りたいと活動を始めて十四年。基本はいつも原作を読むことにありました。近松の心はその作品に宿っているからです。



近松応援団 (学習会の様子)

### お問い合わせ先

〒661-0024

尼崎市三反田町2-12-5

### 近松応援団

代表 加藤道子さん

Tel 06-6429-2574

# 第二章

肥前 長門

(佐賀県)

(山口県)



## 長門 長門

近松の生誕伝承が残るまら

(山口県長門市)

「江良はよいとこ近松生んで、柿もよいとこ、えらいとこ」

長門市東深川江良には、古くから、

近松門左衛門の生誕伝承があります。

明治時代、この江良に住んでいた

梶杜親すぎもり介氏は、近松門左衛門の本名

が梶杜（杉森）信盛であり、江良の

梶杜家こそ、この近松の家系である

という伝承から、梶杜家が近松ゆか



りの家系であることを確信していたようです。

明治九年（一八七六）、親介氏は、名誉ある家系を守ろうと、江良の真砂山観音堂の境内に「梶杜先祖之塚」を建てました。また、江良にある梶杜家の屋敷跡は、い

まも近松屋敷として語り継がれています。

また、大田南畝おおたなんぼが書いた近松の略伝にも、近松は「本姓杉森、名は信盛、字平

馬、長門萩の人」とされています。南畝

は蜀山人しよくさんじんと称し、江戸時代を代表する学者として知られている人物です。南畝の

この説は、近松の出生地研究に大きな影

響を与えました。近松長門出生説を支持

したのが、森鷗外もりおうがいです。明治三十四年

（一九〇二）に佐賀県唐津市の近松寺を



近松門左衛門の碑

訪れた鴈外は「『近松は長門深川の人』と刻んだ石碑を見つけた」と『小倉日記』に記しています。

昭和八年（一九三三）には地域の人々により、深川小学校前の赤崎山に「巢林子近松翁之碑」も建てられました。

また、赤崎神社には、「楽<sup>がく</sup>棧<sup>せき</sup>敷」（重要有形民俗文化財）が残っています。赤崎山中腹のすり鉢状の地形を利用して谷底に踊り場、傾斜面に階段式観覧席が造られています。江戸時代に村人により芝居や楽踊りが奉納された舞台で、村人は芝居見物を楽しんでいたものと思われます。近松出生の地に「楽棧敷」あり、というわけです。

市制四〇周年を迎えた平成六年度



赤崎神社楽棧敷（赤崎神社楽踊り）

から「近松祭 in 長門」が始められています。近松門左衛門出生の伝承を基にすめられるもので、内容的には文楽や歌舞伎をはじめ近松作品をアレンジした舞踊、演劇、オペラや、大学と提携して行われる講演会など、さまざまなイベントで構成され、市民はもちろん、県内外から研究者、愛好家が数多く参加、高い評価を受けています。

最近では近松ゆかりの地にふさわしく、文化の拠点として「ルネッサながと」がオープンしました。高度な舞台機構を備え、本格的な歌舞伎、文楽も上演できます。

長門市のもうひとつの顔が、最近クローズアップされた童謡詩人金子みすゞです。長門のまちで「みすゞさん」といえば知らない人はいません。漁港せんざき仙崎で生まれ育った彼女のその透明なまなざしは、人間にとどまらず、全ての生き物や自然に等しく注がれ、優しいながらも、私たちが失いかけている大切なものへの「気付き」を詩の中にちりばめています。現在、彼女の詩は、小学校教科書や数多くのメディアにも採り上げられ、あらためて見直されています。



【<sup>こく</sup>国】というのは、市東部の鏡山付近で、ここには古来大陸との交流により繁栄したクニがあつて、それが中国の王朝にも知られていたということです。また市街地西部には、日本の稲作発祥の地として有名な「<sup>なほだけ</sup>菜畑遺跡」があります。

唐津の近松寺（きんしょうじ）には近松のお墓があり、次のような伝承があります。

近松は、長門国（山口県）深川の生まれで、少年の頃、近松寺の第四世住職に連れられて唐津に来て、寺小姓になりました。その後京に上って一条家に仕え、一条家を辞した後、浄瑠璃作家として世に出ました。享保九年（一七二四）十一月二十三日に死去、遺言により、近松寺にお墓ができたということです。また、近松門左衛門というペンネームについては、近松寺に学んだことから近松と称し、寺の修学少年を「さもん」と呼ぶことから、名を門左衛門としたと伝えられています。



近松寺

近松寺は、瑞鳳山ずいほうざんと号する臨濟宗の寺院で、創建は乾元元年けんげん（一二三〇二）です。その後一時中絶しますが、慶長四年（一五九九）に領主により現在地に再建されたもので、寺地は唐津城下西側の西寺町の一角を占めています。山門は慶長四年の再建時に名護屋城の一の門を移築したものと伝えられています。

境内には、近松の遺髪塚いはつづかをはじめ、とんちで有名な曾呂利新左衛門そろりしんざえもんが造ったとされる庭園「舞鶴園」、織部灯籠おりべとうろう（キリシタン灯籠）、茶室などがあります。また、「小笠原記念館」には、幕末に藩主を務めた小笠原家の家宝や、郷土の先覚者の資料が展示されています。

唐津の伝統文化では、「唐津焼」「唐津くんち」が有名です。日本三大陶器の一つ唐津焼は、素朴な土の味わいが魅力で、砂目のざんぐりとした土味の中に、わびさびの美が生きています。毎年十一月二日から四日まで、唐津の街は唐津くんち一色に染まります。曳山行事は、昭和五十五年（一九八〇）、国指定重要無形文化財に指定されました。

## 近松研究のメッカ 「近松研究所」

近松にゆかりの深い尼崎市にある園田学園女子大学に設置されている研究機関です。平成元年に誕生しました。近松をはじめ、近世演劇や芸能、近世文学を研究することが目的です。叢書そうしょや研究紀要も刊行、このほか古典演劇、近世文学・一般に関する資料一五万件余がデータベース化されてホームページから検索でき、所蔵資料は一般にも公開されています。まさに「近松研究のメッカ」といえ、近松について研究する場合、まず最初におとずれておきたいところです。



近松研究所閲覧室

### 利用案内

月～金（祝日を除く）10:00～17:00  
閲覧希望の方はお問い合わせください。

### 園田学園女子大学近松研究所

〒661-8520  
兵庫県尼崎市南塚口町7-29-1  
TEL06-6429-9928 FAX 06-6429-9922  
E-mail [chikamatsu@sonoda-u.ac.jp](mailto:chikamatsu@sonoda-u.ac.jp)  
<http://www.sonoda-u.ac.jp/chikamatsu>

## 近松の旅

園田学園女子大学 近松研究所

冥途・黄泉の旅芝居に赴き給ふ——これは、正徳四年（二七二四）九月十日、竹本筑後掾が亡くなったことを記した『今昔操年代記』の記事です。もちろん、この「旅芝居」というのは比喻表現ですが、生前、元禄期の筑後掾（義太夫）は、文字通り「日々旅にして、旅をすみか」としていました。たとえば、元禄八年（一六九五）。三月、義太夫は尾張国児玉村にいました。門弟（竹本新太夫・喜内）や三味線弾き（竹沢権右衛門）、人形遣い（小山庄左衛門）らを連れての旅興行です。児玉村で五月九日まで興行した後、十七日から杉村で（以上、『黠鷗籠中記』）、七月は京都の伏見で興行していました（『見聞予覚集』）。居続けたのかどうかは分かりませんが、九月にも伏見御香宮で興行しています（『御香宮三木家文書』）。明けて、元禄九年の四月には紀州の新堀へ（『家乗』）、とい

つた一年でした。

これは、義太夫だけのことではなく、たとえば、『家乗』によると、元禄期、上方の宇治加太夫（加賀掾）（元禄五年一月、三月）、伊藤出羽掾（元禄六年一月）、竹本内匠・喜内（元禄九年五月）が紀州で興行しています。歌舞伎役者でも、たとえば、坂田藤十郎と「甲乙なき両輪の役者」と言われた山下半左衛門は、元禄十三年、京都での興行ができなくなり、八月、奈良へ巡業にをかけています（この巡業を当て込んで、翌年『けいせいならみやげ』を上演しています）。

旅興行は、名人・上手であっても、この時期ふつうにあったのです。義太夫も、筑後掾という名誉称号を朝廷から授けられた後も、たとえば、元禄十五年、正月には名古屋尾頭町おとうちまう、三月には名古屋あやめ町あやしま万松寺下で（『鸚鵡籠中記』）、そして、八月には伊勢の津八幡祭で興行しています（『津市史』）。『曾根崎心中』が爆発的にヒットする前年のことです。『今昔操年代記』が、筑後掾の芸人としての誉れは輝かしいものだが、「ほつこりとした蔵人なく。三八の十八にて、合はぬそろばん。胸算用合ふて、合はぬは世間なみ」と記す通り、常小屋で興行をし

続けることの難しさが窺えます。

ところで、右の津八幡の興行については、太夫 竹本筑後掾、ワキ 竹本喜内・佐内はじめ、三味線弾きや人形遣いはもちろん、口上なども含め、三十人ほどの一座の人々の名前が記録されています。その中に、作者として近松門左衛門の名前も見えます。この旅興行に近松も同道したのでしょうか。

元禄十一年八月十日から、筑後掾は名古屋尾頭町で興行を始め、九月二十九日には尾州公別邸での酒宴の席に呼ばれています（『鸚鵡籠中記』）。この期間、近松はどうしていたのでしょうか。『金子一高日記』によると、八月十六日以降、毎日、一高（金子吉左衛門）の家で節句替りの狂言の相談をしています。狂言作者として、役者のいる（劇場のある）京都を離れられなかったのです。

これは、歌舞伎にかかわっていた時期だけのことではありません。年代は不明ですが、近松晩年と思われる、伊勢屋清兵衛宛ての近松の書簡が二通残っています。紀州行辞りの文、尾崎行辞りの文と呼ばれているもので、誘いに対して、それぞれ紀州行き、尾崎行きを断る内容が記されています。その断りの理由が、

いずれも「浄ルリ替り前」「替り浄留り之相談」、すなわち次の浄瑠璃の準備のためだったのです。前者では、その準備は「私ならぬ義」ともあり、太夫などの演者、座本竹田出雲などの劇場関係者などをまじえての相談なり、執筆なりだったのでしよう。

つまり、専属的な作者となるまではともかく、狂言作者・竹本座の座付作者となつてからの近松に、旅に出る時間的余裕はなかったと思われます。また、近松を座付作者に迎えてからの竹本座は、元禄期のように一年のほとんどを旅に過ごすような興行ではなくなりました。旅興行をしていた芝居が作者を得たことで、常小屋での興行を可能とすると同時に、皮肉にも、その作者は旅をすることができなくなつたのです。そのような近松の生涯における最大の旅は、十代後半、生まれ育つた越前から京都への、一家挙げての移住だったと言つてよいでしょう。まさに作者近松への旅立ちでした。

(井上 勝志)

## 取材地・協力者一覧

---

—福井県 福井市—

- 福井市役所 (☎0776-20-5111)  
〒910-8511 福井市大手3-10-1
- 社団法人 福井市観光協会 (☎0776-23-0525)  
〒910-0018 福井市田原1-13-6 (フェニックスプラザ1F)
- 福井県庁 (☎0776-21-1111)  
〒910-8580 福井市大手3-17-1
- 北の庄城址柴田神社 (☎0776-23-0849)  
〒910-0006 福井市中央1-21-17
- 足羽山 (足羽山公園遊園地 ☎0776-34-1680)  
〒918-8006 福井市山奥町58-97

—福井県 鯖江市—

- 鯖江市役所 (☎0778-51-2200)  
〒916-8666 鯖江市西山町13-1
- 越前漆器協同組合 (☎0778-65-0030)  
〒916-1221 鯖江市西袋町37-6-1
- 王山古墳群 (日の出町)
- 西山公園 (公園管理事務所 ☎0778-51-1001)  
〒916-0027 鯖江市桜町3-7-20
- 鯖江市資料館 (☎0778-51-5999)  
〒916-0024 鯖江市長泉寺町1-9-20
- 立待公民館 (☎0778-51-3376)  
〒916-0005 鯖江市杉本町702-2
- 吉江藩館跡碑 (吉江町)
- 西光寺 (☎0778-51-1539)  
〒916-0005 鯖江市杉本町31-42-1
- 春慶寺 (☎0778-52-2015)  
〒916-0002 鯖江市米岡町5-1
- 天満神社 (吉江町)
- 天満神社 (杉本町)
- 天満神社 (西番町)

- 渡し場跡 (石田下町)
- 株式会社 大黒屋 (☎0778-51-0451)  
〒916-0026 鯖江市本町2-1-13
- 有限会社 鯖江菓撰栄進堂 (☎0778-51-0471)  
〒916-0026 鯖江市本町2-3-3
- 近松 (☎0778-53-1122)  
〒916-0027 鯖江市桜町3-3-3 (サバエシティホテル内)

—福井県 丹生郡朝日町—

- 朝日町役場 (☎0778-34-1234)  
〒916-0192 丹生郡朝日町西田中13-5-1
- 古墳公園 (朝日町朝日)
- 大谷寺 (☎0778-34-5045)  
〒916-0117 丹生郡朝日町大谷寺40-4-1

—福井県 坂井郡三国町—

- 三国町役場 (☎0776-82-3111)  
〒913-8501 坂井郡三国町中央1丁目5-1
- 三国町観光協会 (☎0776-82-5515)  
〒913-0063 坂井郡三国町東尋坊
- 月窓寺 (☎0776-81-2565)  
〒913-0047 坂井郡三国町神明1-2
- 三国漁港 (三国港漁業協同組合 ☎0776-82-3269)  
〒913-0056 坂井郡三国町宿1-17-23

—福井県 敦賀市—

- 敦賀市役所 (☎0770-21-1111)  
〒914-8501 敦賀市中央2-1-1
- 氣比神宮 (☎0770-22-0794)  
〒914-0075 敦賀市曙町11-68
- 氣比の松原 (敦賀市観光協会 ☎0770-21-8686)  
〒914-0801 敦賀市松島町

—福井県 武生市—

●武生市役所 (☎0778-22-3000)

〒915-8530 武生市府中1-13-7

●酒造家倶楽部 一力 (清酒 門左衛門販売 ☎0778-22-1540)

〒915-0812 武生市桂町1-18

—福井県 坂井郡春江町—

●株式会社 エクシート (☎0776-51-5678)

〒919-0482 坂井郡春江町中庄61-32

—滋賀県 大津市—

●大津市役所 (☎077-523-1234)

〒520-8575 大津市御陵町3-1

●社団法人 大津市観光協会 (☎077-528-2772)

〒520-0047 大津市浜大津1-4-1 (大津市社会教育会館内)

●園城寺 (☎077-522-2238)

〒520-0036 大津市園城寺町246

●近松寺 (☎077-522-0411)

〒520-0054 大津市逢坂2丁目11-8

●関蟬丸神社 (逢坂1丁目)

—京都府 京都市—

●京都市役所 (☎075-222-3111)

〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上ル上本能寺前町488

●社団法人 京都市観光協会 (☎075-752-0227)

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 (京都会館内)

●株式会社 臨川書店 (☎075-721-7111)

〒606-8204 京都市左京区田中下柳町8

●上賀茂神社 (☎075-781-0011)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山339

●永観堂禅林寺 (☎075-761-0007)

〒606-8445 京都市左京区永観堂町48

●大覚寺 (☎075-871-0071)

〒616-8411 京都市右京区嵯峨大沢町4

- 東福寺 (☎075-561-0087)  
〒605-0981 京都市東山区本町15-778
- 真如堂 (☎075-771-0915)  
〒606-8414 京都市左京区浄土寺真如町82
- 本圀寺 (☎075-593-9191)  
〒607-8403 京都市山科区御陵大岩6
- 壬生寺 (☎075-841-3381)  
〒604-8821 京都市中京区壬生榎ノ宮町31

—大阪府 大阪市—

- 大阪市役所 (☎06-6208-8181)  
〒530-8201 大阪市北区中之島1丁目3-20
- 大阪市ゆとりとみどり振興局集客観光課 (☎06-6615-0695)  
〒559-0034 大阪市住之江区南港北1-14-16 WTCビル17階
- 大阪城 (☎06-6944-0546)  
〒540-0002 大阪市中央区大阪城1-1
- 大阪城天守閣 (☎06-6941-3044)  
〒540-0002 大阪市中央区大阪城1-1
- 露天神社 (☎06-6311-0895)  
〒530-0057 大阪市北区曾根崎2-5-4
- 大長寺 (☎06-6351-6570)  
〒534-0027 大阪市都島区中野町2-1-14
- 国立文楽劇場 (☎06-6212-2531)  
〒542-0073 大阪市中央区日本橋1-12-10
- 近松門左衛門の墓 (中央区谷町8丁目)
- 玉造稻荷神社 (☎06-6941-3821)  
〒540-0004 大阪市中央区玉造2-3-8
- 生国魂神社・浄瑠璃神社 (☎06-6771-0002)  
〒543-0071 大阪市天王寺区生玉寺町13-9
- 銀山寺 (☎06-6771-2702)  
〒543-0073 大阪市天王寺区生玉寺町6-26
- 四天王寺 (☎06-6771-0066)  
〒543-0051 大阪市天王寺区四天王寺1-11-18

- 青蓮寺 (☎06-6772-0979)  
〒543-0073 大阪市天王寺区生玉寺町3-19
- 超願寺 (☎06-6771-6654)  
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-1
- 通天閣 (☎06-6641-9555)  
〒556-0002 大阪市浪速区恵美須東1-18-6
- 難波八阪神社 (☎06-6641-1149)  
〒556-0016 大阪市浪速区元町2-9-19
- 大阪フィルハーモニー会館 (☎06-6656-7701)  
〒557-0041 大阪市西成区岸里1-1-44
- 近松門左衛門の碑 (松乃木大明神内)  
〒557-0002 大阪市西成区太子2-3-19
- 安養寺 (☎06-6653-8519)  
〒557-0042 大阪市西成区岸里東1-7-15

—大阪府 大東市—

- 大東市役所 (☎072-872-2181)  
〒574-8555 大東市谷川1-1-1
- 慈眼寺 (☎072-876-2324)  
〒574-0015 大東市野崎2-7-1
- 法妙寺 (☎072-872-8114)  
〒574-0014 大東市寺川4-8-1

—兵庫県 尼崎市—

- 尼崎市役所 (☎06-6489-6880)  
〒660-8501 尼崎市東七松町1-23-1
- 広濟寺 (☎06-6491-0815)  
〒661-0977 尼崎市久々知1-3-27
- 近松記念館 (☎06-6491-7555)  
〒661-0977 尼崎市久々知1-4-38
- 近松公園 (☎06-6489-6385)  
〒661-0977 尼崎市久々知1丁目
- JR尼崎駅 (☎06-6481-0416)  
〒660-0808 尼崎市潮江1-1-1

- JR 塚口駅 (☎06-6429-5679)  
〒661-0011 尼崎市東塚口1-9-1
- 阪急塚口駅 (☎06-6421-7769)  
〒661-0012 尼崎市南塚口町2-12-112
- 園田学園女子大学近松研究所 (☎06-6429-9928)  
〒661-8520 尼崎市南塚口町7-29-1
- 近松応援団 (☎06-6429-2574)  
〒661-0024 尼崎市三反田町2-12-5

—山口県 長門市—

- 長門市役所 (☎0837-22-2111)  
〒759-4192 長門市東深川1339-2
- 長門市観光協会 (☎0837-22-8404)  
〒759-4101 長門市東深川正明市1324-1
- 近松屋敷跡 (東深川江良)
- 巢林子近松翁之碑 (深川小学校前)
- 赤崎神社楽棧敷
- ルネッサながと (☎0837-26-6001)  
〒759-4106 長門市仙崎818-1
- 金子みすゞ記念館 (☎0837-22-2656)  
〒759-4101 長門市東深川803-8 ウェーブ5F

—佐賀県 唐津市—

- 唐津市役所 (☎0955-72-9111)  
〒847-8511 唐津市西城内1-1
- 唐津城 (管理所 ☎0955-72-5697)  
〒847-0016 唐津市東城内8-1
- 菜畑遺跡 (末盧館 ☎0955-73-3673)  
〒847-0844 唐津市菜畑3359-2
- 近松寺 (☎0955-72-3597)  
〒847-0815 唐津市西寺町511

—個人—

- 吉田文雀氏

# 資料提供一覧

	頁	写真内容	提供
12		吉江藩城下町跡想定図	(株)エクシート
20		福井城跡	福井市観光課
22		北の庄城址柴田神社	福井市観光課
32		氣比神宮	敦賀市観光課
33		氣比の松原	敦賀市観光課
38		京都の春（上賀茂神社）	(社)京都市観光協会
39		京都の夏（総本山永観堂禪林寺）	(社)京都市観光協会
41		京都の秋（大覚寺大沢の池）	(社)京都市観光協会
41		京都の冬（東福寺通天橋）	(社)京都市観光協会
42		大阪城	大阪城天守閣
51		野崎観音（慈眼寺）	慈眼寺
53		近松公園・近松記念館	尼崎市ちかまつ・文化振興課
55		広濟寺	尼崎市ちかまつ・文化振興課
56		近松祭の様子	尼崎市ちかまつ・文化振興課
56		近松の墓	尼崎市ちかまつ・文化振興課

67	65	62	61	58	57	57
						梅川の像
						近松断章
						近松応援団（学習会の様子）
						近松門左衛門の碑
						赤崎神社楽棧敷（赤崎神社楽踊り）
						近松寺
						近松研究所閲覧室
						（尼崎市ちかまつ・文化振興課
						尼崎市ちかまつ・文化振興課
						近松応援団
						長門市商工観光課
						長門市企画振興課
						唐津市観光課
						園田学園女子大学近松研究所

## あとがき

『ちかまつうるる読本 ザ・近松』第三卷「近松を旅する」を発売いたします。最終巻のこの本は、近松の生誕から作者としての生涯を閉じるまでに近松が実際にたどったであろうゆかりの地や、作品の舞台となった土地についての、散策ガイドブックです。

作品を味わうとき、実際にその地を訪れると、臨場感にあふれ、登場人物の心情に迫ることができません。近松も、大坂や京都で事件があると、その現場まで足を運んで作品の構想を練ったと言われています。また、作品を読んでもその土地を訪れてみたくなることもあるでしょう。そんなとき、この本が皆さんのお役に立てれば幸いです。

最後に、この本の制作・編集にあたり、お世話になりました諸先生方にお礼を申し上げます。近松研究の第一線でご活躍の信多純一先生には「私の近松の旅」を執筆していただき、巻頭を飾っていただきました。園田学園女子大学近松研究所の先生方には、本シリーズを通して並々ならぬご協力をいただきました。水田かや乃・井上勝志両先生には終始、懇切なご指導をいただき、「近松の旅」についても執筆していただきました。また、福井大学教授三好修一郎先生には、さばえ近松倶楽部顧問として、献身的なご支援をいただいております。今後より一層のご指導をお願い申し上げます。

さばえ近松倶楽部  
ちかまけん

平成十五年三月



近松の情にふれあうまら 鯖江

「ちかまつうるる読本」

ちかもんくん  
ザ・近松 ～鯖江発～ 第3巻 『近松を旅する』

平成15年3月 発行

監修 ————— 園田学園女子大学近松研究所

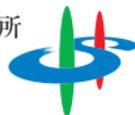
編集・発行 — さばえ近松倶楽部

鯖江市教育委員会 文化課

福井県鯖江市西山町13-1

〒916-8666 電話(0778)51-2200

デザイン・印刷— 株式会社齋藤印刷



この本は再生紙を使用しています。